

ユウ岡崎 YU OKAZAKI

元キャロル～伝説のドラマー

1975.4.13. 雨が降る日比谷野音で行われたコンサートを最後に解散した日本が誇る伝説のRock'n Roll バンド「CAROL」。メンバーは、矢沢永吉 (b, vo)、ジョニー大倉 (g, vo)、内海利勝 (g)、ユウ岡崎 (ds) の4人。今や伝説と化した『ラスト・ライヴ!』でのワン・シーン…「ズッコケ娘～スローダウン」でドラム・ソコを叩くユウに微笑みながら近づくエーちゃん。そして、そのエーちゃんに微笑み返すユウの姿。その光景に胸を熱くしたファンは多いはず。始めから終わりまで、全てが伝説的だった3年間を疾風の如く駆け抜けていったキャロル。解散から30年、メンバーの中で唯一沈黙を守っていた伝説のドラマー&キャロルの中で一番クールだった男、ユウ岡崎のインタビューが遂に実現した!

(2005年12月27日 Jazz & Coffee『AROMA』にて)

取材 & 文：加瀬正之 取材協力：山内浩史 (C's Graffiti Japanese Rock'n Roll Band) & Jazz & Coffee『AROMA』



写真提供：カドヤ

＜現在、C's Graffiti Japanese Rock'n Roll Bandで活動中のユウさん。再びスティックを握り始めたその動機とは…＞

20年くらいブランクがあって、5、6年くらい前かな。ずっと一般の会社で一生懸命働いているんだけど、何で毎日の生活と人生がひとつにならないのかって考えていた時期に、かみさんに「ちよっとスタジオに入ろうか」と言われたのがきっかけで、毎日のように通うようになって、そのうちに面白くなってね。何でそんなに煮詰まっていたのか、だんだんその疑問が読めてきたの。その間、ストーンズとかビートルズ、ザ・フーとか音楽演奏していたやつを叩きながら、何か「ジャズ的」っていう感じなのかなあ…「スイングで捉える」という形をずっと演奏してきましたね。そうやってスイングで捉えるコツを掴むと、演奏している人達が本当に目の前にいるような感じがするんですよ。まあ、一種の妄想みたいなね。で、だんだんテクニックが上がってくるに連れて、もう廣になっちゃってね。何十年ぶりに人生で一番知りたかったことっていうのかなあ。その

人達がどんなことを考えながら、何をアピールして、何を目的に演奏しているか。その人達の人生と心、生活とかまで見えてくるような。結局、俺も人間は会社員として働かなきゃならない。俺にも人生と生活と心がある。何かこう、本当の自分を見つめられるようになった感じだった。それが新たに演奏しようという結果に繋がったんだよね。

＜GOOD-BYE CAROL＞

エーちゃんがベース・ギターを置いた時点で「ああ、エーちゃんがベース置いちゃったんだから、もうあのバンドをやるっていう方が無理なんだ。俺はこの道以外で、新たに自分の人生を見つけないかならないんだ」と、それははっきりした形で自分自身の中にありましたよ。

＜約20年のブランクについて＞

キャロル解散後は、何やっていいかわからなくて、一年間遊んじやったんですよ。でも、その後に「もうガムシヤラに生きてみよう! ガムシヤラに働いちゃおう!」と思って、

もう何でもいいから、親類が「こういこうと、おせんべい屋さんがあるよ」なんて言うのと、とにかく「そこへ働きに行こう」と。で、朝6時頃起きて、自転車で10キロくらい走って通いましたよ。27歳くらいで、若かったからね。で、そのおせんべい屋さんで働いていたら、そこが潰れちゃったんです。でも、その配達をしていた人達を西武で雇う形になって、そこで働いていた奴はみんな西武に入るきっかけになったのね。それで西武に入って、最終的に喧嘩して辞めちゃったんですけど、7~8年働いていたのかなあ。俺から言わせると、西武って神様みたいな会社なんですよ。でも、昔のアンダーグラウンドなんかやってた連中がチョッキイかけて来て遊びに行ったりして、結局潰されちゃった形です。で、西武を辞める羽目になっちゃって…その時に「神様みたいな会社だったんだなあ」と思いましたよね。

＜C's Graffiti Japanese Rock'n Roll Bandに加入＞

今現在、キャロルにしてもコピーバンドが



「日本語のロック」に革命を齎せたフジ・アール・バム! 後半は70年代のカヴァーを収録。

ルイジアナ
キャロル
(ユニバーサルミュージック・PHCL-3027)

全曲、矢沢ジョニーの同名シングルも大ヒットしたセカンド。

ファンキー・モンキー・ベイビー
キャロル
(ユニバーサルミュージック・PHCL-3028)

キャロルレコード・テレビ番組のきっかけとなったテレビ番組でのライブ・イン「リップ・ヤング」

ライブ・イン「リップ・ヤング」
キャロル
(ユニバーサルミュージック・PHCL-3029)



インタビュー中、ユウさんの表情が何処となく「アーちゃん」とダブル瞬間があった。だが、ユウさんは言った。「俺がアーちゃんに似てるんじゃない。アーちゃんが俺に似てるんだよ。」

「何か生き生きと話しているでしょ」と語るユウさん、毎日スタジオに通い、何時間もドラムの練習に打ち込んでいた頃の貴重な一枚。スイングで捉えるスタイルはこれから生まれたのだ。



たくさんあるけど、俺が演奏しなかつたら、結局コピーバンドが混雑した状態になっちゃうっていう気持ちがあつてね。スイングで捉えていると、そのコピーバンドの姿っていうのも見えてくるんですよ。それに、昔一緒に演奏したり、対バンした人達とか、そういう人達の姿がだんだん見えてくるの。でも、それを捉えるまでには、行き詰っちゃたり、一度、新宿でアングラやってた人達に誘われて、ブルースのバンドを立ち上げたところまで行っただけで、結局ブルースは駄目だったね。根底にはあるんだけど、日本人としてブルースをやることに関して、「ちょっと筋が違う部分があるな」って感じてね。で、一人でスタジオ入って練習している頃に、山内と知り合って、そのバンドで活動を再開したんだ。(C's Graffiti Japanese Rock'n Roll Bandについては、P22 参照)

＜ドラムを始めたのはいつ頃ですか＞

小学校4年生の時で、ドラム・セットじゃなくて鼓笛隊で叩いた時。70円のスティック買ってね。でも、前分でやっても目立ちたがり屋っていう部分も先に出て、演奏はもうメロメロだったの(笑)。本当にフル・セットを使い始めたのは、16歳の時だね。

＜バンドを組んだのはいつ頃ですか＞

本格的にグループ組んだのは、17歳の時だね。学校行きながら土曜日っていうとディスコ行って叩いていたら、学校をサボってはないんだけど、あんまり広まっちゃったもんだから、学校でも「お前卒業して叩け」って、謝恩会でストーンズとかビートルズとか叩いたことあるんですよ。大受けしちゃうね(笑)。で、試験休みの時なんか、俺が叩いているディスコで、学校の友達なんか150人くらい来て踊ってんですよ(笑)。「お前、こんどころいって退学しなすっやつたらどうするんだよ」って言われるんだけど、「俺には神様がついてるから大丈夫。

俺はみんなの喜ぶ顔が見たくてタイコ叩いているんだし、そこにはちゃんと神様が叩いているんだから、無期停学だ、退学だなんて絶対ありえないよ。神様がちゃんと許してくれるよ！」って言ってたんだよね。それが当時の俺の口癖だったんですよ(笑)。その頃から音楽と神様っていうのが結びついているような感覚がありましたね。

＜最初に憧れたドラマーは誰ですか＞

憧れたドラマーとか、そういうのはなかったね。例えば、町内会で一番！ 池袋が一番！ こればかりだったからね(ユウさんは、東京都豊島区生まれ)。だから、周りの人達に「何だアイツ、始めから曲が分からないの叩けちゃうって、おかしくないか？」なんて、そういう風に言われてましたよ(笑)。タイコって結構運動神経いるじゃない、どっかっていうと運動神経で叩いている部分が多かったみたい。あの頃よく聴いていたのは、やっぱりローリング・ストーンズかな。

＜キャロル加入前の活動＞

学生バンドの頃は、プロになるとか、それで飯を食うなんて考えてなかったんだけど、あれは19歳の頃だね。「何としかして、プロにならねえなあ。これ4畳半の部屋を借りて、毎日演奏して飯が食えればいいなあ」って思うようになったんですよ。で、たまたま俺の先生っていうのかなあ。サウスボーのドラマーで、今アロー・ナイツっていうところで叩いてる人なんですけど、その人がバンド持って、赤羽っていうところに見に行っただんですけど、「プロになりたい」という意識を持ってね。でも、その時は諦めちゃったんだけど、ちょうど同じ頃に学校の友達から電話が掛かってきて、「青山っていうところにいるんだけど、いい女たさんいやら遊びに来ていよ」って言われてさ。朝の4時頃までやっている店で、地下室なんですよ。聖心女学院とか、ああいうところに

通っている綺麗な姉ちゃんとか結構いるお店だったんですけど、2、3回行っているうちに、そのお店の人が、俺が1曲か2曲くらいタイコ叩いたのを見たんですよ。で、「ドラム探してるんですけど、一ヶ月トラでやってもえませんか？」って言われて、そこで始めたのがきっかけですね。その時は、大木オルさんとか、大木さんのザ・サードっていうバンドがいました。そこでは、CCRとか、当時のヒット・ソング。ジェームス・ブラウンとか、オーティス・レディングとか、あいう黒人ソウルね。あと、俺が入ってからニュー・ロックやり始めて、トム・ジョーンズの曲が多かったですよ。で、「お前はもう「トムトム」っていう名前にするから」って言われてね(笑)。(注：C'sの山内さん曰く、「キャロルのアルバム「唯一」ユウ岡崎」でなく、「岡田トム」でクレジットされたものがあり、キャロル・マニアはこの「トムトム」って聞けばピンとくる) そうだ。そのソウルバンドやっていたうちに、新宿の「サンダーバード」っていうところで、帰国したサムライと対バンがあっただですよ。その時にマイナー・レーベルで村井邦彦さんが立ち上げた「マジックルーム・レーベル」っていうレコード会社があって、「そこに入れよ」なんて言われて、その時はトゥー・マッチとか、小坂忠さんとかがありました。で、そこへ入ったけど、結局レコーディングしないうちにポシヤっちゃったりしてね。あと、昔ドリフターズってヴォーカルがいたんですけど、そのヴォーカルの人事務所まで働かして頂いていたんですよ。キャロルに入る前にね。

＜キャロルのドラマー、ユウ岡崎誕生＞

その「マジックルーム・レーベル」のことがあって、そのうちに「キャロルのドラムが辞めるからお前入れよ」なんて言われて、フリップから叩いて叩いたら「うん、お前入れよ」って、それでキャロルに入ることになったんだけど、俺の場合はレコード会社

★★



キャロル最後のスタジオ録音
となる作品、ユウ岡崎作詞
作曲の「素敵な天使」も収録。
キャロル・ファースト
キャロル
(ユニバーサルミュージック・PHCL-3030)



キャロル解離の直前にリリース
された企画盤、エモ未発表楽曲
ライヴ音源などを収録した異色作。
GOOD-BYE CAROL
キャロル
(ユニバーサルミュージック・PHCL-10)



燃えつきる＝キャロル・ラスト・ライヴ!
1975.4.13 キャロル
(ユニバーサルミュージック・PHCL-3031)

の人に誘われて、うちの兄貴と俺と本契約したんです。兄貴が契約したから、よく分かるなかったんですけどね (笑)。キャロルに関してはミックキー (カーティス) さんが発掘したって言われて (内田) 裕也さんは「あれはフジテレビで発掘したんだから、何でもテレビが電話一本で発掘しなきゃならねえんだ」って、これ 20 何年間ずっと言い続けてますから (笑)。どっちが発掘したっていうじゃないですか (笑)。で、フィリップスに行った時に、「芸名にしようか」と言われて、本名が「たかもと (友)」だから「ユウ」、「お前、今日から「ユウ」な」と言われちゃって (笑)。

＜キャロル時代の思い出のライブ＞

一番思い出に残っているのはね、ドリフターズの『8 時だヨ! 全員集合』に出たことがあるんですよ。そこで『ジョニー・B・グッド』叩いたの。もう完璧だったですね (笑)。うん、それが一番! 絶対でこれ! って感じたっただけですね。でも、やっぱりあの番組の偉大さ、いかりや長介さんなり、加藤茶さんなり、あのグループの陰に潜んだいの。本当に真剣勝負で最高の音を出させやう、そういう場を作り出したあの人達って本当に凄いなどお思いましたよ。あれは八王子での収録で、一曲やるために朝 9 時頃から夜 8 時過ぎまでいたんですよ (笑)。でもあれがやっぱり一番印象的だったですね。あと、『ワン・ステップ・フェスティバル』(1974 年) で共演したオノ・ヨーコさん。今、大人になって考えたら、ヨーコさんと楽屋で話しかけなかったんですけど、凄く親切にしてくれてたんだなって思ってます。隣にジ・ヴェルトナー (ds) がいて、バリバリ練習してるっていう凄いな状況ね。俺、今 54 歳ですけど、そういう何か感情論みたいなもの、内在に秘めたものを感じ取りながら、「あの時こうだったなあ。優しかったなあ」とって考えようになっちゃたね。

＜一番好きなキャロル・ナンバー?＞

一番楽に叩ける「ハニー・エンジェル」かいいっすね。バンドでやったことないけど、楽して叩ける一番受けるからね (笑)。だから迫力も何もないんですけど (笑)。

＜元キャロルとして＞

今、C's Graffiti っていう面白いな人達とやってるけど、結局、「エーちゃんがベース置いたんだからもう別のもんだ」という見方は必ず自分のなかであって演奏していますね。エーちゃんがベースを捨てた後のその人個性。そして、どういう風にあのバンドを持っていたか。そこに俺自身があっていたか。同じことやってたんじゃない駄目だ」と、そういう俺自身がありますね。だ



ベスト盤! 貴重な写真も満載

デンタル、も話スターリングに
べる音源でも話題を呼んだ



ザ★ベスト
キャロル
(ニューバーサルミュージック・UMCK-4048)

現在、ユウ岡崎が在籍する
のアルバム。全二十曲入り!



C's Graffiti Japanese Rock'n Roll Band
のアルバム。全二十曲入り!

現在、ユウ岡崎が在籍する
のアルバム。全二十曲入り!



ユウ岡崎 & His Family 2000
C's Graffiti Japanese Rock'n Roll Band
(詳細は P22 参照)

一日比谷野外音楽堂
で行われた伝説的キャロル解散
コンサートのドキュメント映像!



C's Graffiti Japanese Rock'n Roll Band
のアルバム。全二十曲入り!

から、昔の名残で「ユウさ〜ん」なんて声をかけられても、「あ、そう」で終わりますよ。俺の心の中ではね。ただ、毎年一回「Super LIVE in YAMANASHI <キャロル祭>」(詳細は P7 参照) 行ってやっていますよ。俺を慕って見に来て、俺のタイコを聴いてタイコ叩いている人。キャロルによって人生が変わった人。そういう人達が見に来ているんだよね。同じ風には叩かないけど、やっぱりそこにはあるのは俺自身なんです。この前も静岡で「ゼット・ミーティング」というバイク・チームの集まりがあって、そこによっと出演させてもらったんです。演奏しなくてトークでね。それで、前の日から宴会に出席して、そこで「何か歌って下さいよ」と言われたから、「いいよ」と言っておいて、エーちゃんの「時間よ止まれ」歌ってたんだよね (笑)。そしたら、いきなりサイン攻めにあっちゃって、ビックリしちゃったよ。あと、初めて名古屋で呼ばれた時も「ユウさん、300 人くらい集まるんですけど、何かやってもらいませんか?」って言うから、一人で行って「何やるんだよ」と言ったら、「ユウさん、『ラスト・ライブ!』やって下さい」と言うので、一、二曲目から叩き方を変えた新しい俺自身をやったら、もう総立ちですよ。昔の俺じゃないんだけど、叩き方違わうんだけど、やっぱりお客さんを見て俺自身を見てくれるんだよね。心の底で、「楽しかやってくるかい?」「間違わない人生歩ますかやますいよ」と、そういう気持ちはありますよな。

＜ビートルズの存在＞

衛星中継とか今テレビでやってるけど、あれを最初にやったのはビートルズの『愛こそはすべて』だからね。人間の心の中から歌える曲をやっている。地球の存在っていう感じが。そういうものを発しているっていう感じ。「並みのものじゃないぞ」という見つけ方がありますよな。彼等の大きさっていうのは、もうよっと近づけないよな。

＜キャロル時代に自作の「素敵な天使」を発表していますが、現在、作曲は?＞

何年か前、スタジオ通っていた時に、スタジオの人に「シャレで作曲したんだけど」って言ったの。そしたら、「機材も揃ってますし、いいですよ」と言うわけ。「いや、俺がリズム叩いて、その上にベースとギターかぶせて何か曲になるようにしたい」と言うたら、「できますよ」と言うの。でも、初めてその人に会った時、「お前何だ。ドラムやんのか?」って、俺に向かって言うわけ。当時の俺を知らないたのね。でも、演奏しているうちに、その人の態度がだんだん変わって来るわけですよ。それで、昔の俺のことが分かった時点で、「ユウ岡崎 & His Family 2000」



「Good Old Rock'n Roll」本邦初公開! ユウ岡崎、幼少期の貴重なショット!

ウさん、今度一緒に演奏しましょうよ!」だって (笑)。あの時はビックリですよ。それから、「俺は有名じゃないんだ」として自分自身に叩き込まれちゃったんですよ。あの一言で (笑)。それで、オリジナルは 2 曲ばかり作ってみたの。「波の光」という曲とね、もう一曲は「ブラック・ナイト」みたいな曲。この 2 曲は形にしたいっていうのはありますね。でも、どうして昔の曲の方がいいっていうメンバーの意見が多くて、俺の意見が通らないんだよね (笑)。

＜ユウさんの夢・希望＞

音楽的にもっと上手くなりたいとか、一流や外国のミュージシャンの誰とやりたいたいとか、そういうのはないですね。タイコを叩いていく上で、例えば一昨年キャロルの『ザ★ベスト』が 40〜50 万枚くらい売れたんですよ、その時に数字的にプレスリーの記録を飛び越しちゃったっていうことがあったんですよ。そういう軌跡みたいなのこととか、音楽を通して、俺だたらドラムを叩くことで、荒んじやってるこの世の中を活性化できればいいかなっていう希望は強いね。

＜キャロル再結成について＞

何かこう、明るいな社会になってもらいたいという希望の元で、世の中を活性化したり、人に喜びを与えたり、何か作り上げるんであれば、それが一番手取り早いと思えますよ。ただ、バンドとしてまとまるかっていうのがあって。これまでも「いいよ、お前ら 3 人でキャロル演奏しろよ」と言われてくれたエーちゃんがいたんですよ。今まで否定しててもそれが肯定になったんですよ、「いい

よやれよ」って。俺も内海さんともジョニーとも一緒に演奏しただけど、その肯定をいっ方向に持っていくは良かったんだけどね…。

＜ジャズからの影響＞

「ジミー・スミスっていう人とか、ウェザー・リポートの鳥の羽をガーって広げてるあのアルバムとか聴いてですね。もう「これこそスイング！」って感じだったね。でも、俺がそれをやりたいんじやなくて、何かこう、心の透明感っていうのを凄く感じたのね。日本だとカシオペアがそういう感じじゃないですか。「ジャズ」って言うんですけども、サッチモとかサット・キング・コールとかああいっ人達の方に向かってちゃって、日本人として汚らしい感覚になっちゃうところがあるってね。曲自体は感動的なんですけども、日本人として生きてる俺自身には、「ジョン・レノン聴いていた方がいいなあ」ってなっちゃうんだよね。俺も若い時にはスイングなんて分かんなかったですからね。新宿の『タロウ』とかで、スイングやっている人達をよく見てたんですけど、「ああ、この人達は天才なんだからしょうがねえや」なんて、そういう風に見てましたよ（笑）。たまたま俺がブラソウだったの。猫をジャラして11時で、8の字描いていたんです。それが猫にとっては一番ジャラすんですよ。それでブラソウ覚えちゃったんですよ（笑）。でも、「アイ・ラブ・ユー・OK」なんてエーちゃんやってくるじゃん。あれブラソでやったらいいなあと思いますね。

＜ユウ岡崎とブルームス＞

どっちかって言う俺が一番気に入っているのがね、ブルームスとか、ああいっ感覚。あいうの好き。何か聴いてると凄く落ち着くっていうか、「自分なんだ！」って気がするんですよ。ガキの頃から何を聴くにもブルームス。「あれを忘れちゃいけないよ！」ってずっと思ってた。それに、ブルームスとかベートーベン、そういう人達の音楽そのものよりも、何でそういう曲を作ったのかって、俺凄く興味があったの。戦争やって、戦争に勝って言って、戦争に負けて、その時に人間が衰進しちゃって。それに喜びを持たせるために「喜びの歌」を作ったんだよな。こんなんですよ。やっぱりそこに凄く興味があったのね。何のために作ったのか。それが分かるってね。例えば、「第九」なんかもタイ

コで表現したくなっちゃうんですよ。「やっぱり音楽っていいなあ」って感じるんですよ。

＜知られざる『ラスト・ライヴ！』の裏側＞

あの昭和50年4月13日に俺の甥っ子が生まれたんだよ。で、同じ屋根の下に住んでいる姉さんがお医者さんでおい頼まれちゃって、俺はあの日はおきり言って演奏どじやなかったんだよ（笑）。あっちフラフラこっちフラフラしちゃってね（笑）。でもそんな誰とも知らないじゃないですか。あの火事もね、上見たら火の粉がボウ落ちてきて燃えてんだよ。「最後まで演奏するんだろなあ」って思ったら、タイコをセツティングしてくれてた人が来て、「ウウさん、逃げて下さい！」って言うんだよ（笑）。「演奏しなきゃまずいだろう？」って言うたら、「いや、そんなこといいです！」ってね（笑）。でも、あれで革ジャンから何からどに行ったか分からなくなっちゃってね。解散してから、それを回収するところから始めたんだよ（笑）。それでタイコ磨いて、それから新しいの人生が始まるよ。楽器も俺の家に全部置いてあったんですけど、あげちゃったものもありますね。その他にも人に貸して戻って来なかったりしてね。でも、キャロルのスタッフは本当に楽器を大切にしてくれたんですよ。俺、解散して思ったけど、当時楽器一回も磨いたことなかったの（笑）。それは「可哀想だったなあ」と思ってた（笑）。あのライヴの後は、青山の店で打ち上げやって、それ終わってからはみんな全然別行動だった。エーちゃんも、トム・マックスとレコーディング決まってたしね。

＜ドラマー、ユウ岡崎の魂＞

最後に、俺がひとつ言いたいのは、音楽を通しての喜びとか活性とか心の通い合い、外国で言うワウルって言うんですか。でも、日本人にも魂ってあるんですよ。それは何かって言うと、俺なんかがガキの頃は、各家庭に神様、魂がいたんですよ。そこは日本人としての音楽があったんですよ。今はそれがなくなっちゃって言うじゃないですか。「自分の好きなように生きるんだ」って、「子供生まれたら殺しちゃえほしいや」って、食わずの大変だから。今、こういう社会があるのね。各家庭に神様、魂がなくなっちゃった。これを取り戻すのが一心にタイコ叩いてCDが売れて、それをきっかけに新しいユー



Photo by Mika Sakai

トピアができればいいと思う。俺はそっちを望みたい。誰と共演したいかとかそんなことどうでもいいの。魂存在で演奏してある奴、今あまりいないからね。ジャズメンにも「8ビートに魂がねえ」って言われることが多いけど、俺、8ビートなのよ。でも、8ビートにそれがいないんじゃないかって。あるんだって。だって、ピートルズやビーチ・ボーイズにあるじゃない。俺はそれをやりたいんですよ。今の若い人たちは8ビートにそれがあるとって一生懸命やっているんですよ。ね、そこなのよ。でも、今の若いやつら何やってるのか全然分かんない部分もある。テレビにでも、まねばかりで心に残らないんだもん。でも、エーちゃんの歌は心に残るでしょ。何でか。やっぱり魂があるんだよね。俺にとって、タイコっていうのは折りの道なんですよ。自分がどれだけ神様信じてるか。それを折っている自分自身がタイコとして表現できれば、それは折りなんですよ。日本人として、日本人に残す魂を大切にしたいよね。音楽を通して、「魂を見つめていこうよ」、「心の生き方していこうよ」って、俺はそれを一番話したいですね。



★ユウ岡崎プロデュース★

Super LIVE in YAMANASHI Vol-7 < CAROL 祭り >

2006 4.15 (Sat) 甲府カズーホール 055-243-7069 (<http://kazoohall.com/>)

1. ユウ岡崎 (元 CAROL) C's Graffiti Japanese Rock'n Roll Band (ユウ岡崎 BAND) < <http://sound.jp/cgph/> >
2. 内海利勝 (ご存知元 CAROL のスーパー・ギタリスト!) < <http://sound.jp/uchiumi/> >
3. MICHELE (CAROL & TROUBLE コピーバンド) 愛知県・関西代表 < <http://m-pe.tv/u/page.php?uid=michelle&i=1> >
4. CAROLO (CAROL コピーバンド) 三重県・関西代表 < <http://carolo-web.hp.infoseek.co.jp/> >
5. LEGEND (CAROL コピーバンド) 埼玉県・関東代表 < <http://www3.plala.or.jp/lennon/?> >
6. THE REVERSE (CAROL コピーバンド) 山梨県代表 < <http://sound.jp/cgph/reverse.htm> >
7. YOKOHAMA LADY (CAROL カバー・R&R 全般) 神奈川県・関東代表 < <http://www.yokohama-lady.com/> >
8. リッキー (廣田龍人) さん (元バンドボーイズ現リボルバー) < <http://www.moz.co.jp/revolver/> >
9. BONONO (一般参加 BAND) 東京都 < <http://sound.jp/bonono/> >
10. ラスカズ (一般参加 BAND) 東京都 < http://www.geocities.jp/rascalz_jp/ > 【順不同】

2006 1.25 より WEB チケット予約受付いたします。(限定 250 枚) / 2006 2.1 より発売予定。
価格 2006 2.1 ~前日まで ¥5,000 円 (税込) / 当日 ¥6,000 円 (税込) / 注: 前売り券完売の場合は当日券はございません。